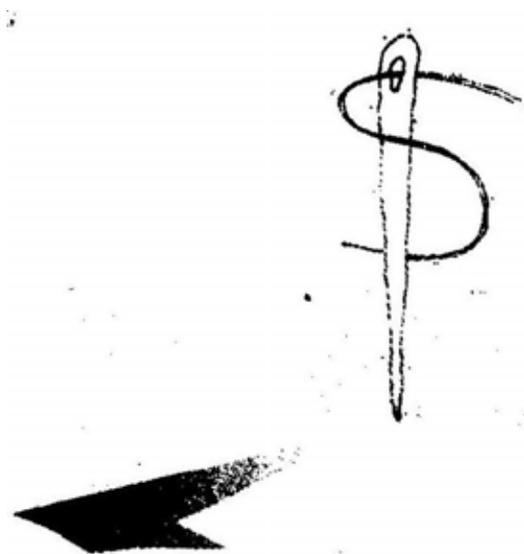


針が行くところ糸も行く

第3編 16章

信仰義認の教理を批判する教皇主義者たちの偽りの中傷を論駁する。



私たちの教理は善き行いの無い信仰や、善き行い無しに成立する義認を主張しているのではありません。信仰義認の教理を要約すればこのようなものです。信仰と善き行いとは針と糸のようにいつも一緒なのですが、それでも依然として義認の根拠は私たちの行為にあるのではなく、信仰にのみあるのです。それはどんなに正しく、明快な主張でしょうか。

影のようにいつも付き従う間柄を針と糸のようだと表現することがあります。本来、針と糸は着物を縫って、人にそれを着せるために作り出されたものです。それは北部ユーラシアの各地で暮した狩猟民族が防寒具として動物の皮から衣服を作り出す過程で作られたものだと言います。最初は動物の皮に錐で穴をあけ、そこに動物の筋を細く糸のようにしたものを通し結びました。そのようにしているうちに旧石器時代後期ごろに、針穴がある針が発明され、穴を開けることと縛ることを同時にすることができるようになったと言うのです。ところで、信仰と善き行いは針と糸との関係によく似ています。信仰があるところには善き行いが必ず伴うからです。

第1節 信仰義認の教理は私たちの善き行いを排除するものなのか。

私たちが行為によって義とされたり、ある功績によって救われるのではなく、ただ信仰によってのみ義とされ、救われると語ることに對して大変に気分を害する人々がいます。彼らは私たちをまるで善き行い破棄主義者でもあるかのように扱おうとするのです。彼らの根拠のない偽りの批判は簡単な一言で十分に反駁することができます。しかし、ここでは彼らのその批判を一つずつ詳しく取り上げ、さらに詳しく反駁することにしましょう。

まず最初に、信仰義認の教理が善き行いを排除すると言う彼らの批判についてです。このように私たちを批判する彼らが誠実にその善き行いについて考えているのが気がかりなところもあります。なぜならば、彼らは実際には心のままに悪しき生活を送りながら、自分たちはこの世で最も善き行いを愛し、善き行いのために一番の関心を払っているかのようなふりをしているからです。彼らは私たちが信仰を賛美することで、行為の価値を低めていると言うのです。しかし、私たちの教理をよく理解すれば、全くその心配の必要がないことがわかります。

私たちの教理は善き行いの無い信仰や、善き行い無しに成立する義認を主張しているのではありません。信仰義認の教理を要約すればこのようなものです。信仰と善き行いとは針と糸のようにいつも一緒なのですが、それでも依然として義認の根拠は私たちの行為にあるのではなく、信仰にのみあるのです。それはどんなに正しく、明快な主張でしょうか。もし、私たちの考えをキリストに集中すれば、その主張がどんなに正当なものであるかをすぐに理解することができるのです。

私たちが信じたと言うことは、キリストの義を受けたと言うことです。それはただキリストの義だけが私たちを神と和解させることができるためです。キリストの義を除いては世のどのような義も私たちを神と和解させることはできません。ですから善き行いではなく、ただ信仰だけが私たちの義認や救いの唯一の根拠となるのです。

しかし、信仰によってキリストの義を受けるなら、私たちは彼の聖もう受けることになるのです。キリストが私たちを義とし、聖とし、救いとなってくださったからです(コリント第一 1:30)。繰り返し語ればキリストは私たちを義としてくださると同時に必ず聖としてもくださるのです。この二つの恵みは永遠に切り離されることはなく、一つに結びついています。

ですからキリストはご自身の知恵の光りで照らす者たちを贖い、その贖われた者を義とし、その義とされた者を聖としてくださるのです。キリストは唯一の恵みの手段ですが、彼は私たちに義と聖の二つのものを与えてくださるのです。そしてその二つを区別することはできても、決して分離することはできないのです。もし、私たちが義とされるためにキリストを所有したのなら、必ず彼の聖にもあずかるようになるのです。針が行くところ、糸も行くのと同じです。

第2節 信仰義認の教理は善き行いに対する私たちの情熱を抑え込むものなのか。

次は第二の批判です。私たちの善き行いは自分たちのどのような功績にもなり得ないと考えるなら、本当に善き行いに対する私たちの情熱は冷めてしまうのでしょうか。私たちの善き行いにはどんな功績も価値もないと信じる人と私たちの行為には保証されるだけの価値があると信じる人の中で、いったいどのような人がより善き行いに対して情熱を抱くことができるのでしょうか。私たちの敵対者たちは人々が自分の行為に価値を見いだすことができこそ、善き行いをさらに励もうとするようになるのだと主張します。彼らはたぶん私たちに善を行う力を与え、またその与えられた力で行う私たちの善き行いにご褒美まで与えてくださる神のその大いなる寛大さをとても信じることはできないようです。

とにかく彼らの批判は次のような二つの理由から、恥ずべきものであることが明らかになります。第一に人が保証を求めて神に仕えたり、人が神に自分の労働の価値を認めさせようとするのはまことに愚かで、無駄なことなのです。すでに調べたように人の善き行いにはそのような価



値は全く無いだけではなく、神はどんな報いも望むことなく献げられる礼拝と愛を喜んでくださる方だからです。神からの保証の希望が全くないときにも、神に仕えるそのような人を求めておられるのです。

そして第二に、私たちに善を行うように促す最も強力な衝動は保証ではなく、私たちがどのように救われたか、また神が私たちを召し出された目的が何であるかを深く悟るところにあると言う事実です。自分の行動に価値があると考えるよりは、神の愛に深い感謝を覚え、その神を深く愛するとき、善を行おうとする熱情が私たちの内にわき上がってくるのです。

まず私たちを愛されたその愛を思うなら、私たちも愛で応答せざるを得なくなるのです（ヨハネ第一 4:10、19 参照）。キリストの血が私たちの良心を清め、死んだ行いからも離れさせ、生きておられる神に仕えるようにさせるのです（ヘブライ 9:14）。そのように清くされた私たちがどうして新たな悪に染まってその聖なる血を冒流することができるのでしょうか（ヘブライ 10:29）。恵みによって罪から解放されたのですから、今、私たちは真の自由の中で真実なる義を実践し、生きなければならないのです（ローマ 6:18）。

私たちはキリストにあって死に、今からはキリストの体となって、天の旅人として、天に宝を積んで生きようになるのです（コロサイ 3:1 - 3；マタイ 6:20；テトス 2:11 - 13）。私たちはすでに聖霊が住まわれるところされているのですから、聖ではない行動で、自分を汚すことができないのです（コリント第一 3:16、17；コリント第二 6:16；エフェソ 2:21）。そして私たちは今、光の子なので闇の業で捨て、光の子として生きようとするのです（エフェソ 5:8、9；テサロニケ第一 5:4、5）。「愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです」（ヨハネ第一 4:11；ヨハネ 13:34 参照）。

私たちが善を行わなければならない理由を捜そうとするならば、ヨハネのこの言葉よりさらに有力な動機をどこで見いだすことができるのでしょうか。私たちを召してくださった父が聖であられるために（ヨハネ第一 3:3）そして私たちの主イエスが私たちの模範となられたために（ペトロ第一 2:21；ヨハネ 15:10、13:15）私たちは溢れる熱情をもって善を行う道を走り通さなければならないのです。

私たちが信仰によってだけ義とされると告白することは、私の行為にはどんな価値も無く、た

だ神の愛と恵みによって義とされたと言うことを認めることなのです。ですから、私たちは感謝せざるを得ないものとされるのです。そして信仰によってのみ義とされるという確信は世のどのようなものよりも私たちに善に対する情熱の炎を与えるのです。神の愛と恵みに心から感激しているために、私たちの心には保証を考える余裕さえ全く生まれてこないのです。

第3節 私たちが善を行う動機は神の栄光のためであり、神の慈しみためです。

針と糸はいつも一緒です。そして針が糸について行くのではなく、糸が針について行くのです。信仰と善き行いはいつも一緒です。しかし、いつも信仰が前で、行為が後から伴うものなのです。ですから私たちのすべての善き行いは自分の功績や保証のためではなく、神の栄光のためなされるのです。そして神の慈しみに感激する心から生まれる感謝で献げるものなのです。ですから聖書は私たちの善き行いを奨励し、忠告するとき神の慈しみを私たちに勧告しています（ローマ 12:1；テモテ第二 3:16、17 参照）

もちろん聖書には神がそれぞれの人の行為に応じて報いを与えられるという言葉が存在します（ローマ 2:6、7；マタイ 16：27；コリント第一 3:8、14、15；コリント第二 5:10）。しかし、このみ言葉が善き行いに対する注意であったり、最も重要なものだと言うことはできません。また信仰と善き行いの問題についての論議をここから始めることはできないのです。このみ言葉は彼らが宣伝するそのような功績を支持するものではないのです。ただ、これらのみ言葉は私たちが聖なる人生を生きるようと励ます言葉なのです。

次のように詩編は私たちの教理を美しい表現で示しています。「しかし、赦しはあなたのもとにあり／人はあなたを恐れ敬うのです」（詩編 130:4）。神の慈しみを受け入れなければ神の栄光を表わすこともできないと語っているのです。また教皇主義者が「功績ある業」と語る神を畏れることは、ただ罪の赦しから生まれるものであって、それは全く私たちの功績となることはできないのです。真実に私たちが善を行う唯一の動機は私たちのその業で神が栄光を受けられるということです（マタイ 5:16）。もし、神の栄光については心を動かされない人々であっても、神の恵みを黙想し、そこに思いめぐらすなら、たぶん善を行いたいという心が豊かに起こされるはず（クリソストモス）

第4節 信仰義認の教理は罪人に罪を犯させるように導くものなのか

最後に第四番目の非難です。行為とは関係なく信仰によってのみ義とされることができると言う教理は私たちの心に罪を犯させる衝動を与えるものなのではないでしょうか。この批判こそ批判の中でも最も無意味なものです。義と救いを私たちは代価なしに受け取るのですが、それを与えてくださるキリストの側ではご自身の最も聖なる、尊い血を流してくださったからこそ、私たちに支払うことのできなかつた代価が支払われたのです。キリストの血の他に神の裁きを満足させる供え物はないためです。

人々の善き行いというものはどんなに清くても、神の義しさの前では排泄物にすぎないのです（フィリピ 3:8）。私たちの罪責はあまりにも大きいためにそのようなゴミでは贖うことはできません。私たちの義を回復させるための避難所は神の慈しみにしかありません。ですから私たちが善を行うことはそれで私たちの功績を残し、保証をうけるためのものではなく、無代価なその尊

い贖いの恵みと愛に励まされるためです。このような励ましと感謝が心にある人は誰でも罪を憎み、再び罪で自分を汚さないようにと心掛けるのです。

結びの言葉

針が行くところに糸も従います。信仰があるところにはいつも善き行いが伴います。自分の功績を徹底的に否定して、ただ信仰によってだけ義とされたと言う確信と感激をもつ人は誰よりも熱心に神に仕え、善を行おうとするのです。